

気仙沼のコミュニティのために、高校生ができること。

241班 熊谷みのり 泉祐芽 菅原碧 佐藤琴海 鈴木ゆか

私たちは気仙沼に生まれ、その地域のコミュニティの中で育ってきた。しかし今、その地域住民同士のつながりが薄れてしまっている。私たちが生まれ育った気仙沼のコミュニティのため、高校生となった私たちにできることはなにか、考え実行していきたい。

序論

現在の気仙沼市には、コミュニティをとる場所が活用されず地域住民同士の繋がりが薄れている、若い人が地元を知らない、自治会などの活動に参加する人が少なくなっているという課題があると考えた。これらを改善していくために私たち高校生に何ができるか考え、現状把握と何をすべきか知るため、フィールドワークへと足を運んだ。

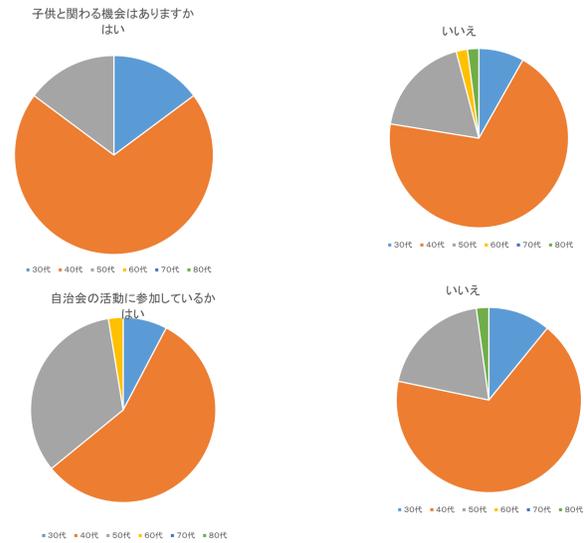
仮説: 私たちの手で新たなコミュニティを形成することだと考えた。

本論 気仙沼の現状について

気仙沼高校1学年保護者を対象にアンケートを行った。

結果

- ・自治会などにあまり参加できていない
 - ・仕事や家庭の事情で参加できていない
 - ・役員の多くを定年後の年配の方々が占めていて若い人が参加しづらい
 - ・少子化により子ども会の活動が委縮している
- 地域間の多世代交流の減少が深刻化している



私たちに人口減少など、大きな問題を解決することはできない。そこで、私たちは、**人交密度**(人と関わる密度を表す言葉)を上げるということを目標とした。

地域の方々の声

- 「子どもからお年寄りまで共存できる地域を目指したい(30代)」
- 「子どもに声をかけただけで不審者といわれたい(40代)」
- 「震災を思い出し、防災に役立てる(40代)」
- 「10代が新たな力として地域に貢献する(50代)」
- 「お互いを知り、ともに楽しい時間を過ごしたい(50代)」
- 「老若男女問わずのびのびと安心して暮らしたい(30代)」

地域の方々の

希望→地域の発展や存続のため、地域住民間での交流をしたい

現実→自治会の活動の減少などを理由に交流の機会がなく、近所とも疎遠になっている。

解決方法・改善方法

私たちの手で地域の方々が交流できる機会をつくりたい。

→地域の交流のきっかけとなるイベントを行う。

題して、「歩いて知ろう！気仙沼！」

- ・地域に住むお年寄りから子どもまで、いろんな世代の参加を予定
- ・自分たちの住む地域を自らの足で歩き知る
- ・地域に住む方々がお互いを知るきっかけにする



現時点

- ・計画段階
- ・地域と密接関わりながら活動する浜わらすに取材
- 実際にイベントを行うにあたってのアドバイスを頂いた

春休み中のイベントの実行を目標として、現在計画を進行中。

結論

私たち高校生が気仙沼のコミュニティのためにできること、それは、高校生という若い世代である私たちが地域に関心を持ち関わり続けていくことだと考えた。ひとりひとりの力は微力なものだが、これからも気仙沼に住む高校生として、地域に関わり続けていきたい。

課題

実際にまちあるきイベントを実行するにあたっての協力者を募らなくてはならない。

協力いただいた方々

- ・気仙沼市役所まちづくり推進課 神谷淳様
- ・NPO法人浜わらす様
- ・宮城大学 佐々木秀之教授

参考文献

- ・気仙沼市HP
- ・『地元学をはじめよう』 吉本哲郎 著

